

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月20日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520272

研究課題名（和文）トニ・モリスン文学テキストにおけるおとぎ話深層構造の分析

研究課題名（英文）An Analysis of the Narrative Framework of Fairy Tales in Toni Morrison's Literary Texts

研究代表者

鶴殿 悦子 (UDONO ETSUKO)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：00128638

研究成果の概要（和文）：トニ・モリスンの文学テキストにはおとぎ話・民話・歴史等の物語の枠組みが見られる。しかし、表面的な枠組みはやがて換骨奪胎され、まったく異なる物語の枠組み、すなわち物語の深層構造が現れてくる。このような物語構造の特徴は、物語内容と深い関係をもっている。つまりそれは人と人との関係性の暗喩なのである。モリスンの小説において、血縁、人種、性、階級等に拠る通常の関係が無効にされ、まったく新しい関係が取り結ばれてゆくさまを検証した。

研究成果の概要（英文）：Toni Morrison's literary text contains the narrative frameworks such as fairy tales, folktales, and history. However, in the course of the story, the apparent narrative framework is replaced by a different and deeper one. Such a change of the narrative framework is closely connected with the narrative content of the novel. This research examines how in Morrison's novels, the relationships based on blood, race, gender, class, etc. are deprived of their meaning and the new human relationships are formed instead.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：米文学・アフリカ系アメリカ文学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) トニ・モリスン研究は、様々な観点から研究されてきた。代表的なモリスン研究の傾向をあげると、人種的観点からの研究（Harris, Peterson, Page）、黒人文化的観点からの研究（Furman, Heinze, Samuels,

Jones, Reyes, 藤平, 吉田）、歴史主義的研究（Baker, Jr., Matus, Grewal）、精神分析的な研究（Spillers, Bouson, Rushdy, Demetrakopoulos, Rigney）、読者反応批評（Phelan, Dixon）、ブラック・フェミニズム批評（B. Smith, Evans, Carby, Butler-Evans,

Holloway, McDowell)、マルクス主義批評 (Mbalia)、神話批評 (Otten) 等、多岐に渡っている。単著の他に、優れた批評アンソロジー (Bloom, N. McKay, Gates, Jr. and Appiah, Peterson, Middleton) や事典類があり、現代作家としては充実した批評状況を呈してきた。しかし、モリスンの第8作『ラヴ』以降、本国内外で出版された研究・批評が減少しているのは、ブームが過ぎたというのではなく、別の事情があると思う。つまり、現在の状況は、モリスン批評の第一期が終り、新しい批評の局面の出来が待たれているのである。第二期の批評の主流は、作者の影響から解放されたテキストの厳密な分析になるべきであろう。それには、合衆国以外の研究者によるイニシャティヴが必要となってくるはずである。

(2) すでにいくつかの拙論においてモリスンの作品について分析してきた。論文「語るもの／語りえぬもの—Toni Morrison の *Beloved*」(『英語青年』145 巻 7 号・8 号、1999 年) においては、二つの物語プロットを抽出してみたが、それをおとぎ話／民話の構造へと結びつけるには至らなかった。しかし、『スーラ』『ソロモンの歌』『タールベイビー』についての各論文では、その構造をある程度浮かび上がらせることができたと思う。

## 2. 研究の目的

(1) トニ・モリスンの小説テキストには、おとぎ話／民話の深層構造が隠されている。ことを証明し、その意味を探ることが目的である。このことを指摘した論者はまだいない。この発想は単なる思いつきではない。というのも、モリスンは数多くの寓話の絵本を出版しているし、小説中にも民話やおとぎ話への言及が数多くある。こうしたことから、寓話やおとぎ話はモリスンの表現手段として非常に重要なものなのである。しかし、このことはほとんど指摘されていないし、それが文学テキストの深層構造に関係すると指摘する論者はまだいないように思う。

もちろん、たとえば小説『タールベイビー』では、黒人民話「タールベイビー」がその物語構造を構築しているとして、多くの論者が作品分析をしてはいる。しかし、タールベイビーは読者の意識をそらすためのレッド・ヘリングにすぎない。同様の意匠が、モリスンのすべての作品において見られる。モリスンの小説には、きわめて非顕在的なやり方で、表面上とは異なる物語構造が隠されている。このメカニズムについて検証したい。

(2) それぞれの作品の物語構造を抽出した上

で、著作全体というメガテキストレベルの構造について検証する。同時に、その物語構造が、モリスン文学のコンテンツとどのような関係にあるかについて考察する。また、そこからアフリカ系アメリカ (女性) 文学に特徴的な物語構造を抽出することができるかもしれない。万一それができなくても、考察の結果はたいへん興味深いものになるだろうと予測される。

(3) モリスンのテキストに描かれる逸脱態としてのセクシュアリティは、おとぎ話／民話の物語深層構造と関係があるのではないか。この仮説について検証したい。なぜなら、「赤ずきん」を始め多くのおとぎ話／民話の起源には、セクシュアリティが何らかの形で隠されているからである。このような指摘は、これまでのトニ・モリスン研究においてはなされていない。この観点からは、すでに、ホモエロティシズムとおとぎ話の物語構造を分析した拙論「閉ざされた水の下への欲望—トニ・モリスンの『スーラ』におけるホモエロティシズムの行方」(『越境・周縁・ディアスポラ』、2005 年) その他の論考がある。

## 3. 研究の方法

(1) 2009 年から 2012 年にかけて、モリスンのテキストの精読を深化させると同時に、モリスン文学研究の新しい動向に眼を配る。それと同時に、おとぎ話／民話／寓話、セクシュアリティ／ジェンダーに関する文献、また、モリスンと影響関係にあると思われるハーレム・ルネサンス期以降のアフリカ系アメリカ文学研究に関する文献を読み進める。

(2) 2009 年には国内の主要な学会において研究発表、2010 年にはトニ・モリスン学会国際大会 (パリ第 8 大学) において研究発表、2011 年、2012 年には、日本アメリカ文学会中部支部大会、日本英文学会九州支部大会において、当該研究を中心にしたシンポジウムを企画・実施する。これらの研究発表により、当該研究について国内外の意見を聴取し、研究の深化に役立つ。

(3) 研究最終年度の 2012 年度末までに、本研究をもとに、博士学位請求論文『トニ・モリスンの文学における物語の枠組みと三角形のきずな』を完成させるために、論文の執筆を継続して行う。

## 4. 研究成果

(1) 2009 年には黒人研究の会例会において、2010 年には日本アメリカ文学会中部支部例会において研究発表を行い、当該研究を押し

進める一助とすることができた。

2010年には、パリ第8大学において開催されたトニ・モリスン学会第6回国際大会において研究発表を行った。出席者から好意的なコメントを得たことに加え、諸外国から参加した多くの研究者と情報の交換をすることができた。

2012年4月には、鶴殿が企画したアメリカ文学会中部支部大会シンポジウム「ハーレム・ルネサンスの黒人女性作家再考」を実施し、1920年代作家たちとトニ・モリスンとの重要な接点を確認することができ、次なる研究への手がかりを得た。2012年10月には、英文学会九州支部大会シンポジウム「トニ・モリスンの描くアメリカ植民地時代から公民権運動まで」において講師をつとめ、これまであまり語られてこなかったモリスンの短編小説「レシタティブ」について発表した。いずれのシンポジウムも出席者から好意的な評価を得た。

(2) 上記研究発表原稿を基盤にして論文を執筆し、本研究期間に5つの新しい論文を書くことができた他、論文の英訳も進めることができた。論文は学会誌・紀要・論集等に発表した。これらの論文を取り込みつつ、2012年度末、学位請求予備論文『トニ・モリスンの小説における物語の枠組みと三角形のきずな』を提出することができた。

(3) 当初、トニ・モリスンの文学におけるおとぎ話、民話、歴史等の物語の枠組みについて考察することから始めたが、それ以外の物語の枠組みも視野に入れざるをえなくなった。モリスンのテキストには、当初予想もしていなかった多くの物語の枠組みが深層に隠されていることに気づかされたからである。それゆえ、初期の作品では、おとぎ話・民話・俗謡等が主要な物語枠となり、後期の作品では、歴史・語り・聖書等が主要な物語枠となっていること、そして、それらの枠組みは、物語の過程で、つねに換骨奪胎され、新しい枠組みへと作り替えられていることを明らかにした。

(4) このような物語の深層構造と、逸脱態としてのセクシュアリティは関係しているのではないかという仮説を立てて本研究を開始したが、研究の過程で、それとは少し異なる観点から見た方が正確にモリスンの文学を理解することができるのでは、と考えるようになった。モリスンの文学では、オリジナルの物語の枠組みはラディカルに変更され、換骨奪胎され、まったく別の物語へと変換されるが、このことは人間と人間の関係性の暗喩なのである。モリスンの文学においては、異性愛の関係と見えたものは同性愛の関係

へと、憎悪の関係と見えたものは深い愛情関係へと置き換えられる。血縁、人種、性、階級・身分、地域、文化の差異が易々と乗り越えられ、まったく新しい関係が取り結ばれてゆくさまを検証した。モリスンが世に送り続ける革新的なメッセージを、本研究を通じて明らかにすることができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

すべての研究は「鶴殿えりか」の筆名のもとに行われている。

[雑誌論文] (計5件)

① 鶴殿えりか、「トニ・モリスンの『レシタティブ』における三角形のきずな」『ことばの世界』(愛知県立大学高等言語教育研究所年報)、査読無、No. 5、2013、pp. 111-123

② Erika Udon、“Desire Under the Closed Water: Homoeroticism in Toni Morrison’s *Sula*”『ことばの世界』査読無、No. 4、2012、pp. 115-124

③ Erika Udon、“Take Care Little Red Riding Hood: Female Bonding in Toni Morrison’s *Tar Baby*”『愛知県立大学外国語学部紀要(言語文化)』、査読無、No. 43、2011、pp. 343-360

④ 鶴殿えりか、「裏切りときずな—Toni Morrison, *A Mercy*における愛の構図」『黒人研究』(黒人研究の会会誌)、査読有、No. 79、2010、pp. 63-75, 89, 109

⑤ 鶴殿えりか、「廃屋のカナリア—トニ・モリスンの『ラヴ』における女どうしのきずな」*Seijo English Monographs* (成城大学大学院文学研究科論集)、査読無、No. 42、2009、pp. 33-51

[学会発表] (計5件)

① 鶴殿えりか・宮本敬子・深瀬有希子・小林朋子、シンポジウム「トニ・モリスンの描くアメリカ植民地時代から公民権運動まで」、日本英文学会九州支部第65回大会、2012年10月27日、於九州産業大学

② 鶴殿えりか・風呂本惇子・森あおい・戸田由紀子、シンポジウム「ハーレム・ルネサンスのアフリカ系アメリカ女性作家再考」、日本アメリカ文学会中部支部第29回大会、2012年4月22日、於愛知淑徳大学

③ Erika Udon、“Take Care, Little Red Riding Hood: Female Bonds in Toni Morrison’s *Tar Baby*,” The Sixth Biennial Conference of the Toni Morrison Society, 2010年11月5日、於パリ第8大学

④ 鶴殿えりか、「Toni Morrison, *A Mercy*における裏切りときずな」アメリカ文学会中部

支部例会、2010年2月20日、於名城大学  
⑤ 鵜殿えりか、「裏切りときずな—Toni Morrison, *A Mercy*における愛の構図」黒人研究の会例会、2009年9月26日、於大阪工業大学

〔図書〕(計2件)

① 鵜殿えりか、松本昇、他19名、金星堂、  
『バード・イメージ—鳥のアメリカ文学』、  
2010、pp. 192-210

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

鵜殿 悦子 (UDONO ETSUKO)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：00128638

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：